

オープンキャンパスに行くならこんな視点もどうでしょう

夏休みオープンキャンパスに行く人は多いでしょう。特に、2年生は必ず行くようにと指導されていると思いますし、実際、行った方がいいと思います。オープンキャンパスに行く際、どんなことを考え、どんなところを見るか、いつものように少し変わった視点で考えてみます。

まず、オープンキャンパスは**1校だけで満足しない**、ということです（3年間の間に）。もちろん、第一志望の大学に行ってみてモチベーションを高めるという効果もありますが、オープンキャンパスは、大学の比較の材料を集める場だ、というとらえ方もできます。まず、1つ行ってみると、その後違う大学に行ってみた際に、あの大学はこうだったけど、この大学はこうだった、と比較することができます。大学選びは、単純に一つの指標（例えば偏差値）で上下があるのではなく、「この研究ならこっちの大学の方がいい」とか「学部間の連携ならこっちの大学の方がよさそうだ」という**学びの面**や、「家賃」や「交通の便」、近所にスーパーがあるかというような**生活の面**など、いろいろな要素が絡んできます。その比較をするのがオープンキャンパス参加の目的だと考えてみましょう。

オープンキャンパスで何を見るか

オープンキャンパスは、やはりイベントですので、大学もなるべくいいところを見せようとするし、日常の大学とは大きく違います。例えるなら、はぐま祭に来たお客さんが、磐田南高校ってこんな学校だよねと思うようなものですね。ですが、学部・学科の説明や、入試情報、授業内容、就職状況など、ある程度ちゃんとした情報はもらえます。そのあたりは普通の話なので、ここでは紹介しません。以下、普通のオープンキャンパスの解説ではあまり触れないかもしれないことについてあげてみます。

学部棟の配置

大学によっては、学部ごとにキャンパスが違ったり、同じキャンパスでも、完全に棟が分かれていたり、近接していたりしています。こういったところが案外、大学の特徴だったりしています。例えば先日行った**岐阜大学**は、工学部と医学部（と岐阜薬科大学）が比較的近く、だから**医工連携**がスムーズなんだな、ということを実感することができました。また、**静岡大学**のように斜面にキャンパスがあると、斜面の上と下ではバス停からの疲労度が違います。こういったことは、実際に中を歩いてみないとなかなかわかりません。

図書館

ネットで調べ物をするのが当たり前になっている時代ですが、それでもやはり大学の学びの根幹は図書館です。図書館の場所や、利用方法は見ておきたいものです。もちろん、蔵書数は重要な指標ですね。また、勉強する環境としても魅力的かどうかは重要です。**自習室**や**ディスカッションルーム**が充実しているなんていうのは、やはり現地に行ってみないと分かりません。例えば**金沢大学**の附属図書館はすてきな建物ですし、**名古屋大学**の図書館にはスタバがあったりと、大学ごとに特徴があります。

食堂・売店

多くの大学では食堂があります。お昼はすごく混みますね。その近くにはコンビニや大学生協の売店、そして書店があることが多いです。書店にどんな本が並んでいるかを眺めると、大学のカラーがよくわかります。専門書の割合が普通の書店より多いのはもちろんですが、案外、ライトノベルとか、ガイドブックがあったりして、大学生活がイメージしやすいです。それから、大きい大学だと、売店に**実験用の器具**や**白衣**が売ってたりします。それだけいろんな学生がいるんだな、とワクワクしますよ。あと大学によっては、大学のオリジナルグッズが売っているので、お土産にしてみるのもよいですね。進路室に大学オリジナルマグネットをお土産にくれたらうれしいです（別にねだっているわけではありません）。

大学の周辺散策

もし、一人暮らしをするのであれば、どのあたりに住むのかな、家賃はどれぐらいかな、ということを考えるのも重要です。余裕があれば、大学周辺の食堂・レストラン・カフェでご飯を食べるのもよいでしょう。もしかしたらその大学生がアルバイトをしているかもしれませんね。周辺を歩いてみて、4年間、もしくはそれ以上暮らすことを考えてみるのもまた楽しいです。交通の便や、実家からの距離を気にする人もいますが、実際に大学生生活をはじめると頻繁に帰省はしないですし、また、大学の近くに住んでしまえば、移動の不便もあまり感じません。そうそう、けっこう楽しいのが、**タウン誌**です。「浜松ぐるぐるマップ」(最近見ない)とか「ナチュラル」とか「ひかりあべにゆう」みたいな、地元のことしか載っていないような冊子のことです。こういうのを見つけると、その地域がどんな感じがが少しずつわかります。

まとめ

ちょっと余計なことまで書きましたが、オープンキャンパスは、**実際にその大学の雰囲気を自分なりにとらえ、他大学と比較するために行く**、ということを改めて強調しておきます。同じ工学部や理学部でも、やはり研究や連携している企業、就職先は違いますし、文学部などは同じ名称でも大学ごとに全然違います。

実際には、特に国公立大学の場合、オープンキャンパスや見学をしたことのない大学に出願・進学することも十分あり得ます。でも、他の大学を見ておくことで、初めての大学であっても、スムーズに大学生活をはじめられることができるでしょう。

この夏も暑さが厳しそうです。熱中症には気を付けながら、有意義なオープンキャンパスにしてください。

大学の過去問をどう使うか／実は大学も過去問を利用している

先日、廃棄対象の赤本の配付を行いました。人によっては、自分が受験するつもりのない大学の赤本なんて不要だと思っているかもしれません。ですが、実は多くの大学が、「**入試過去問題利用宣言**」という取り組みに参加しています。これは、過去に出題された入試問題を、そのまま、もしくは加工して使いますよ、という宣言です。詳しくは以下のページを見てください。

<https://www.nyushikakomon.jp/index.html>



これによると、現在、188の大学がこの宣言に加盟しているそうです。さすがに旧帝大は加盟していませんね。このページの中の「**過去問題利用状況**」(https://www.nyushikakomon.jp/kkm_riyo.html)を見ると、各年度にどの大学・学部が、どの大学の問題を利用したかが一覧になっています。これによると、過去問題の再利用は、理数系の科目が多いということがよくわかります。また、問題を複数回利用されている大学としては、岐阜大学・群馬大学・信州大学・弘前大学・秋田大学・山形大学・金沢大学・鳥取大学あたりが目立ちます。これらの大学は、良質な問題を作成したから、他大学でも利用された、とみることができるといえます。良問を探すにはこれらの大学の過去問を見してみるのもよさそうです。志望校ではない大学の問題にも目を向けることの重要性はわかってもらえるでしょうか？実際、問題集などで、**年の〇〇大学の問題、となっているものも多いですね。

問題の再利用というと、2024年の埼玉大学の英作文の問題は衝撃でした。知っている人も多いと思いますが、2024年の英作文の問題が、2022年の英作文の問題と全く同じだったのです。赤本をばりばりやっていた受験生からすると「えっ、これってこないだやった赤本に出ていた問題じゃん」という状態になったでしょう。去年と同じ問題が間違えて配布されたと思った受験生もいたそうです。

埼玉大学の例は極端ですが、大学の入試問題は完全に新しいものばかりではなく、過去問の再利用も増えています。共通テストでも過去問を利用するという方針がかなり前から発表されています。だからこそ、過去問をただ解くだけでなく、「本番で出たら必ず解く」という意識で取り組むことが大切です。こうしたことを踏まえながら、過去問や他大学の問題に取り組んでみるのがよいと思います。